二〇一九年度　大阪府公立高校入試問題（C問題）

五〇分
九〇点

（注）　答えの字数が指定されている問題は、句読点や「　」などの符号も一字に数えなさい。

一

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

書は絵画に通ずるところがある。画像は物をかたどったものであるかぎり、おのずからにして物の意味をあらわし、これに裏づけられているが、文字も象形的であればあるほど、その形象と意味のあいだに同様の関係がみいだされる。もちろん、象形文字は象形絵画ほどには実物に似ていないが、それでもいくらかその形をとどめており、そのうえ語義として規定された意味の表象をもって直観されるので、多少とも対象的描写の効果をあたえることができる。絵画の美が一つには対象の再現に依存するとすれば、書についてもその象形性が芸術美の一契機であるといえよう。

しかし象形文字も、美の具象性への要求からみれば、あまりに抽象化されている。美が対象の形象と内容の相即不離の関係で相（あ）いともに生成することにあるかぎり、この具象的全体性を欠く文字はそれ自身においては美的品質にとぼしく、いかにすぐれた書家も象形的表現法によって絵画的描写に匹敵する成果をあげることはできない。書の芸術的効果は、むしろ筆勢や墨色そのものによって直接に内なるものを表出することにある。この直接表出は文字の意味にまつわる情調をあらわすとともに、揮毫（きごう）者自身の心のおもむきを形象化する。絵画においても、外面現象の描写がつねに内心の状態や感情の表出とかさなりあっているが、ことに東洋画では、倪雲林（げいうんりん）が「余の竹、胸中の逸気を写すのみ」といったように、描線によって物の形をうつすよりは、運筆の力動性によって心の動きや気魄（きはく）をあらわすことが重んじられるのであった。

まして書では直接の表出力が一層強調されるのであって、「竹」という字は竹のもつ清爽感を生かすとともに、書家の内なる精神的動勢を筆端にほとばしらせるように書かれるとき、一個の芸術的形象となることができる。運筆の遅速軽重にくわえて墨色の濃淡、墨のにじみやかすれが気分状態を反映し、表出の芸術的効果をつよめもする。この点で書は象形画よりも抽象画に類し、ただ文字の形態をもつかぎりでのみ、

Aこれと区別される。しかもBそれは、西洋画法にはみられないほど、手の表出運動を筆跡にとどめ、これによって比類なき表出力を発揮するのである。

さてしかし芸術は表出につきるのではなく、またこれを一定の形式において秩序づけることにある。この芸術的形成によって個々の文字をできるだけ恰好よくまとまった形に書きあげることが、書家の一課題でなければならぬ。アルファベットについても、文字を「美しく書く」ことが「カリグラフィー」とよばれているが、漢字や仮名文字は一層独立性がつよいから一字一字を形式美の法則にしたがって釣合いのとれた形にまとめることがなおさら大切である。「竹」の字はだいたいにおいては一定した形をもっているが、六条の線のプロポーションや左右のバランスのとりかたによっていちじるしく美醜巧拙の差を生ずる。線の長短や傾斜度をたくみに調整して全体として美しい文字形象をつくること、これが「能書家」となるのに必要な条件である。

とはいえ、よくととのった文字を書くだけでは、真の芸術美は保証されない。すべての芸術家は一応美の普遍的形式法則にしたがって作品を形成するが、同時に各自の個性的人格にもとづいてめいめい独特な、しかも自己自身においては一貫した形成のしかたで表現を規定するのであり、これによってこそ滋味ゆたかな美的情趣をかもしだすことができるのだからである。芸術学上、「個性の法則」が作品に顕現したものをスタイルとよぶが、この「様式」にあたる「書風」をそなえた作品をつくることが、書の芸術的価値の決定的な構成契機でなければならぬ。もしひとがただ手本にならって上手に文字を書きととのえるにとどまるならば、その書跡は独自の書風を欠き、千篇一律で味気ないものとなるであろう。書の妙味は個性的に自由な書風を通じてその根底にある書家の人格がうかがわれることにある。人格の象徴としての意義をもつにいたって、はじめて書はもっとも深い美に達することができる。和漢の名書家の作品が並々ならぬ迫力をもってわれわれを惹きつけるのも、その人格的象徴性をはなれては理解できないことである。

（竹内敏雄「芸術学からみた『書』」より）

（注）揮毫者＝毛筆で文字や絵を書く人。
倪雲林＝中国元末の画家・詩人。
胸中の逸気＝ここでは、心の中にある形のない気のこと。

1　Aこれ、Bそれのさしている内容として最も適していることばを、それぞれ本文中から抜き出しなさい。

A	B

2　次のうち、絵画と比較した書の特徴について本文中で述べられていることがらと内容の**合わないもの**はどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア　書における象形文字は、絵画と比較すると抽象的であり具象的全体性を欠くが、多少なりとも対象的描写の効果をあたえられるという点において絵画に通ずるところがある。

イ　書の象形性は芸術美の一契機だといえるが、象形文字は象形絵画ほど実物に似ていないため、いかにすぐれた書家も象形的表現法によって絵画的描写に匹敵する成果をあげられない。

ウ　外面現象の描写によって内心の状態や感情を表出することを重視する東洋画とは異なり、書においては、運筆の遅速軽重や墨色の濃淡などが表出の芸術的効果をつよめる。

エ　描線によって物の形をうつし、その物の意味があらわされるというよりも、筆勢や墨色そのものによって心のおもむきが表出されるという点において、書は抽象画に近いものである。

ア　イ　ウ　エ

3　芸術学からみた「書」について、本文中で筆者が述べている内容を次のようにまとめた。［a］に入る内容を本文中のことばを使って**三十字以上、四十字以内**で書きなさい。また、［b］に入れるのに最も適しているひとつづきのことばを、本文中から**十一字**で抜き出しなさい。

芸術作品がより味わいのあるものになるためには、芸術家は内面を表出するだけではなく、［a］必要があり、書家もそのように作品をつくることで、書は［b］をもち、魅力的な作品になるのである。

a

b

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある修行者に、路次にて鷹野の大名、「お僧いづくへ」とA仰せられた。「愚僧も存ぜぬ」「一段好いた返答ぢや。①斎を申さう。あの森のうちにて、そんぢやうその家へ行きてお参れ」との給ふた。「愚僧ばかり参りては、②いかが候はん」と申されたれば、裏差をBぬいて、しるしに御やり候。これをもちて行き、思ひのまま斎を食うて、一首書きていでられた。

Ⓐ
ここにきし
かかるおもひか
たびの身に
なさけある身を
たのみてぞゆく

さて、殿屋形へ御帰りありて、様子御たづねあれば、この短冊をC御目にかけ申した。能々D思案して御覧ずれば、「小がたなたしかにおく」といふ、義理こもれり。歌の品に、沓冠の風情といふは、これなるべし。

（注）鷹野の大名＝鷹狩りに出た大名。
斎＝僧の食事。
裏差＝腰刀にさしそえた小刀。
殿屋形＝ここでは、大名の屋敷のこと。
風情＝しみじみとした味わい。おもしろみ。

1　本文中のA〜Dの——を付けたことばのうち、その動作を行っている人物の異なるものが一つだけある。その記号を○で囲みなさい。

A　B　C　D

2　①斎を申さうとあるが、次のうち、大名がこのように言った理由として本文中で述べられているものはどれか。最も適しているものを一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア　腹をすかせた修行者に手を差し伸べるのが大名の仕事だから。
イ　自分がどこへ行くかもわからない修行者の過酷さに同情したから。
ウ　大名の質問に対する修行者の返事の内容をとても気に入ったから。
エ　頼み事を聞く代わりに何かほしいと修行者に条件を出されたから。

ア　イ　ウ　エ

3　②いかが候はんとあるが、次のうち、修行者が心配していることの内容として本文中で述べられているものはどれか。最も適しているものを一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア　今の持ち物で険しい森の中を進むことができるのかということ。
イ　森の中の家の場所が修行者一人だけではわからないということ。
ウ　修行者である自分は人からのほどこしを受けられないということ。
エ　自分一人だけで家へ行っても食事をさせてくれるのかということ。

ア　イ　ウ　エ

4　本文中のⒶで示した和歌について説明した次の文の［a］に入る内容を本文中から読み取って、現代のことばで具体的に**十五字以内**で書きなさい。また、［b］に入れるのに最も適していることばを、本文中から抜き出しなさい。

Ⓐの和歌には、意味のあることばを［a］に詠みこむ［b］という技法が用いられており、「小がたなたしかにおく」という内容が読み取れる。

a

b

三　次の問いに答えなさい。

1　次の(1)～(3)の文中の傍線を付けた漢字の読み方を書きなさい。また、(4)～(6)の文中の傍線を付けたカタカナを漢字になおし、解答欄の枠内に書きなさい。ただし、漢字は楷書（かいしょ）で、**大きくていねいに書くこと。**

(1) 新しい分野への進出を企てる。

(2) 春になり梅の花が綻びる。

(3) 真情を吐露する。

(4) 丘の上に偉人のハカがある。

(5) 首相がソカクに取りかかる。

(6) 実験のために葉に光をショウシャする。

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
てる	びる				

2　「人此の道の美なるを知らざる莫し。」の読み方になるように、次の文に返り点を付けなさい。

人莫不知此道之美。

3　次の文中の傍線を付けた語の品詞はそれぞれ何か。あとから一つずつ選び、記号を○で囲みなさい。

五年前の①ある晴れた午後、私は、見たことが②ないほど美しい景色に出会った。

①　ア　動詞　イ　副詞　ウ　連体詞　エ　助動詞

②　オ　動詞　カ　形容詞　キ　助詞　ク　助動詞

ア	イ	ウ	エ

オ	カ	キ	ク

四　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本語を母語としない私にとって、日本の文学との初めての出会いは言うまでもなく、翻訳を通じてであった。それは高校生の頃だったが、まだ日本の文学史や歴史を本格的に勉強したことはなく、来日も無論、したことはなかったので、故郷であるアメリカの北東にある小さな町の、公立図書館に入ってくる限りの情報を断片的につかみ、夏目漱石（そうせき）や川端康成（やすなり）を英訳で読んでみた。

何とも美しい、何とも怪しい、見知らぬ鮮麗な綴（つづ）れ織りの如（ごと）き世界だった。

その驚嘆を追って、①現在は大学院に進んで日本近代文学を専攻している訳だが、意外なことに、日本語や文学史を把握すればするほど、最初に魅了されたその不思議の気持ちが、逃げ回るように遠くなっていく。勿論（もちろん）その代わりに、翻訳されていない作品の発見や、日本の現場に行って地元の人と話してみないと分からないことなど、勉強の過程に連れて現れてくる新しい楽しみもあるので、日本語を勉強し始めるのは過（あやま）ちだった、とか、日本語で読まなければ良かった、とかは思う訳ではない。が、やはり高校の頃に感じた、あの切迫感を持つワンダーが、時には限りなく懐（なつ）かしくなる。

具体的な例を挙げよう。翻訳を読んで最も衝撃を受けた作家は泉鏡花（いずみきょうか）だが、鏡花の作品の中で「眉かくしの霊」という、木曾（きそ）街道の奈良井（ならい）宿を舞台にする小説がある。これを読んだ時、奈良井宿に行ったことはなかったし、宿場の旅籠（はたご）屋はどのような建物かよく分からなかったし、そもそも木曾街道はどこにあるかを漠然としか理解していなかった。だからこそ、想像力が働く余地が出来て、自由自在に頭の中で、こよなく浪漫（ロマン）に溢（あふ）れる、観念的に幻想的な風景とそれに伴う感情とを、のたりのたりと膨らませることが出来た。コンテキストがぼんやりとしていたからこそテキスト自体が一層鮮やかに怪光を放った。その後、小説を日本語で読み直し、鏡花の原文に誘われるように奈良井宿に泊まったが、知識が増えると却（かえ）って想像の領域が縮んでしまうのではないかと、どこかで引っ掛かるように感じたのを覚えている。

知識と想像との鬩（せめ）ぎ合いは翻訳という行為において、とりわけ興味深い逆説を成すのではないかと思う。翻訳家の仕事とは、まず出来るだけ深く原文の作品を読んでその意味合いの全てを拾い、それから出来るだけ完璧にその語彙、表現、文体を目標言語の一番相応（ふさわ）しい語彙、表現、文体に置き換えるということであろう。さてその訳されていない、潜んでいるナニカの刺激的な囁（ささや）きはどうすれば良いの

か。翻訳家は才能の限りに訳し尽くすべきであろうが、そうすると文字通りに、解釈に関して想像の可能性を潰してしまう。しかしその「訳されていないナニカ」を意図的に残そうとすると、翻訳は逆に渾沌（こんとん）とした無意味な状態に陥ってしまう。

言い換えれば、翻訳自体はどれほど新しい「創作」になれるか、もしくはどれほどなっても良いのか、という問題に関わっているのではないかと思う。私も含めて、翻訳の極致は全く外部の創作に手を出すことのない、純粋な変容の行為だと思われる方が多いだろう。ただ、自分の翻訳読書の経験を振り返ってみると、創作としての翻訳も、自分の文学的成長に意外と大きな影響を与えたように思うのだ。翻訳家が意図的に原文以外の内容を付け加えなくても、翻訳という行為による、訳文に響く原文とのギャップの存在が、そもそも新しい創作である。かくしてそのギャップは、訳文の読者に新たな想像力、即（すなわ）ち創作の力を与える訳である。もし私が最初に読んだ鏡花の英訳が原本の日本人読者の環境を復元しようとして、頁（ページ）の上でその時代背景や当時の読者の状況をもっと忠実に表そうとしていたならば、②私は今も鏡花の文学を読み続けていたかどうか分からない。

翻訳によって、原文が持つ玄妙な味わいが失われるというのは本当だろうか。ここでも鏡花の文体を例に挙げよう。彼の小説に幻想的なイメージを付与している魅惑的な文章を、そっくりそのまま違う言語に訳したところで、鏡花を知らぬ異国人にはおよそ理解の及ばない難解な代物と成り果てるだろう。むしろあえて、③目標言語の特徴を重視して腐心した訳文が、原文と同様の魅惑的な世界観を創り出すこともあり得るのだと、英文の鏡花に魅せられた人間として思うのである。

（ピーター・バナード「羯諦羯諦波羅羯諦」より）

（注）　木曾街道＝中山道（なかせんどう）の一部で、現在の長野県塩尻（しおじり）市奈良井を通る街道。
　　　旅籠屋＝旅人を宿泊させるところ。はたご。
　　　コンテキスト＝事柄の背景や状況。
　　　テキスト＝本文。

1　①現在は大学院に進んで日本近代文学を専攻しているとあるが、次のうち、日本語や日本の文学を勉強している筆者が感じていることとして、本文中で述べられていることがらと内容の合うものはどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア　泉鏡花の「眉かくしの霊」を日本語で読み、舞台である奈良井宿や木曾街道がどのようなものかを理解すると、作品のテキスト自体が一層鮮やかに怪光を放つようになったと感じている。

イ　高校生の頃に味わった驚嘆を追って日本の文学を勉強し始めたが、日本語や文学史を把握すればするほど、初めに日本の文学作品に魅了されたときの気持ちが遠くなっていくと感じている。

ウ　日本の文学作品を理解するために勉強をし始めたが、そうすることによって新しい楽しみを見いだしてしまったので、高校生の頃に感じた切迫感を持つワンダーが懐かしくなると感じている。

エ　日本の文学作品を断片的に読むのではなく本格的に勉強することによって、作品の中に表されている見知らぬ鮮麗な綴れ織りの如き世界を、より一層味わえるようになったと感じている。

ア　イ　ウ　エ

2　②私は今も鏡花の文学を読み続けていたかどうか分からないとあるが、筆者がこのように述べる理由を次のようにまとめた。［a］、［b］に入れるのに最も適しているひとつづきのことばを、それぞれ本文中から抜き出しなさい。ただし、［a］は**二十五字**、［b］は**十九字**で抜き出し、それぞれ**初めの六字**を書きなさい。

原文の作品を［a］だけでなく、原本の日本人読者の環境を復元しようとして、作品の時代背景や当時の読者の状況まで訳してしまうと、［b］から。

a □□□□□□

b □□□□□□

3　③目標言語の特徴を重視して腐心した訳文が、原文と同様の魅惑的な世界観を創り出すとあるが、本文中で筆者はこの理由をどのように述べているか。本文中のことばを使って**四十五字以内**で書きなさい。

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□

五 次の資料Aは、オランダの歴史学者であるヨハン・ホイジンガが著した『ホモ・ルーデンス』の冒頭の一文であり、資料Bは、平安時代末期に編まれた『梁塵秘抄（りょうじんひしょう）』に収められている歌の一つである。これらの資料からあなたが考えたことをもとにして、「遊び」とはどのようなものかということについて、あとの原稿用紙に**三百字以内**で論じなさい。ただし、あとの条件1・2にしたがって書くこと。

資料A
遊びは文化より古い。

資料B
遊びをせんとや生まれけむ　戯（たはぶ）れせんとや生（む）まれけん
遊ぶ子どもの声聞けば　わが身さへこそ揺るがるれ

（現代語訳）
遊びをしようとして生まれてきたのであろうか、たわむれをしようとして生まれてきたのであろうか。無心に遊んでいる子どもたちの声を聞くと、自分の体までが自然と動き出すように思われる。

条件1　資料A、資料Bの少なくとも一つについてふれること。ただし、どの資料を参考にしたのかがわかるように書くこと。
条件2　資料からあなたが考えたことを論拠とすること。

・原稿用紙の正しい使い方にしたがって書くこと。
・題名や氏名は書かないで、本文から書き始めること。

200
100

300

二〇一九年度

大阪府公立高校入試問題（C問題）

一

解答

1、A、抽象画　B、書　2、ウ　3、a、美の普遍的形式法則にしたがいながら独自のスタイルをそなえた作品をつくる（35字）（同意可）　b、人格の象徴としての意義

解説

1、A、書は「象形画よりも抽象画」に類するが、「文字の形態をもつ」という点で、書は「抽象画」とは区別されると述べている。

B、直前の文で主語になっていることばをさす。

2、書の芸術的効果は「筆勢や墨色そのもの」によって「内なるものを表出することにある」とした上で、東洋画においても「運筆の力動性」によって「心の動きや気魄をあらわす」ことが重んじられると述べている。

3、a、芸術は表出につきるのではなく、「美の普遍的形式法則」にしたがいながらも、「各自の個性的人格にもとづいてめいめい独特な…形成のしかた」があらわされた「スタイル」をもつ作品こそが、「滋味ゆたかな美的情趣をかもしだすことができる」と述べている。b、「個性的に自由な書風を通じて…書家の人格がうかがわれる」ことが「書の妙味」であり、「人格の象徴としての意義をもつにいたって、はじめて書はもっとも深い美に達することができる」と述べている。

二

解答

1、C　2、ウ　3、エ　4、a、和歌の各句の最初と最後の文字（14字）（同意可）　b、沓冠

解説

1、「短冊」を大名に見せた者が動作主。他は、大名が動作主。

2、「一段好いた返答ぢや」という大名の言葉に着目する。自分の行く先は自分でもわからないと言った修行僧の返答を、大名が気に

入ったことをおさえる。

3、「愚僧ばかり参りては」と言った修行僧に対して大名が、確かに招待されたという「しるし」として「裏差」を持って行かせたことから考える。

4、和歌を、「歌の品に、沓冠の風情」と評していることに着目する。歌の各句の最初と最後の文字だけを読んでいくと「こかたなたしかにをく」となる。このように、意味のある十文字の語句を各句の初めと終わりに一字ずつ詠みこんだものを「沓冠」という。

口語訳

ある修行僧に、鷹狩りに出た大名が、道で「お僧はどちらへいらっしゃるのか」とおっしゃった。（すると僧は）「私も存じません」（と答え、それを聞いた大名は）「その返答、とても気に入った。食事を差し上げたい。あの森の中にある、どこそこの家に行って召し上がれ」とおっしゃった。「自分一人だけで行っても、いかがなものでしょうか」と僧が申されたので、大名は裏差を抜いて、証拠としてお渡しになった。僧はこれを持って行き、思う存分食事をし、一首書いて出て行った。

ここに来て
このような情けを受けた
旅の身の私は
情けをかけてくれる方を
頼りにして旅を続けよう

さてその後、大名が屋敷にお帰りになって、僧の様子をお尋ねになると、家の者は、僧が歌を書いた短冊をお目にかけ申し上げた。大名はじっくり考えてご覧になって、「小刀たしかにおく」という、意味を読み取った。歌の品に、沓冠という技法の風情というのは、これをいうのであろう。

三

解答

1、(1) くわだ(てる)　(2) ほころ(びる)　(3) とろ　(4) 墓　(5) 組閣　(6) 照射　2、人莫（なシ）レ不（ざル）レ知（ラ）ニ此（こノ）道之（の）美（ナルヲ）一。　3、① ウ　② カ

解説

2、一字戻って読む場合には「レ点」を、二字以上戻って読む場合には「一・二点」を用いる。

3、① 活用のない自立語で、体言を修飾する語。② 活用のある自立語で、言い切りの形が「～い」となる語。

四

解答

1、イ　2、a、目標言語の一　b、解釈に関して　3、翻訳という行為による、訳文に響く原文とのギャップが、訳文の読者に創作の力を与えるから。（43字）（同意可）

解説

1、高校生の頃は、夏目漱石や川端康成の「何とも美しい、何とも怪しい、見知らぬ鮮麗な綴れ織りの如き世界」に驚嘆したが、それを追って日本近代文学を専攻して、日本語や文学史を把握していくうちに、「最初に魅了されたその不思議の気持ちが、逃げ回るように遠くなって」いったと述べている。

2、翻訳家の仕事は原文を「目標言語」に置き換えることだが、その際に「潜んでいるナニカ」まで訳し尽くしてしまうと「想像の可能性」を潰してしまい、読者にとって魅力のない訳文となってしまうことをおさえる。

3、翻訳という行為は「訳文に響く原文とのギャップ」を生み出すもので、そのギャップが訳文の読者に「新たな想像力、即ち創作の力」を与えることに着目する。

五

解答

（例）

「遊び」は、人生において欠かせないものだと考える。資料Bが示しているように、遊んでいるときの姿にこそ、人間らしい明るい感情が表れるように思う。勤勉に励むことも大切だが、この子どもたちのように、誰かの気持ちまで動かしてしまうほどの明るい気持ちを抱くことを忘れてはいけない。

また、食べることや寝ることといった生命活動を維持するだけの生活は、人間らしいとは言えない。それ以外の時間に本を読んだり、音楽を聴いたりなどの文化的な営みをしてこそ、人間らしい暮らしと言える。資料Aが示しているように、「遊び」はそうした文化的な営みの原点でもあり、人を生き生きとさせ、人の暮らしを豊かにしてくれるものだと思う。